

◆去る三月一日に救急搬送されて入院した。診断は、聞きなれない病名で「側頭部円蓋部異型髄膜腫」とのことです。手術することになり、六名の医師団で六時間に及ぶ長丁場であった。その後、幸いにも九死に一生を得て、現在独りで自転車に乗り外出できるまでになっている。ことは終活の準備の一つとして、本棚など整理し始めたら、高村光太郎の詩集『智恵子抄』を見つけた。上京して大学三年に編入していた頃、アルバイトをしながら休み時間に読んでいた本だった。角がすり切れていて表紙をめくると楠本幸次のペンネームで書いていた詩「あざみのうた」第三集としてまとめようとしていたメモだった。

池田桂一

◆この頃の暑さは、思いのほか身にこたえる。今までは夏でも、お茶とホットコーヒーで過ごしてきた。まわりの人たちから熱中症に気を付けるように言われる。最近はとくに抵抗力が弱くなっていることを自覚するようになり、ジュースやミネラルウォーターなどで、暑さを凌ぐようになった。突然、田舎の友人から電話があつて、私の住んで居る区内で熱中症で亡くなった老夫婦のことがテレビに出たとのことで心配してくれた。お互いに元気だったので、暑中見舞いのハガキを省略

した。

市川茂子

◆四月からの自治会の仕事も半年近くが経過した。最大の行事と云われている夏祭りが終わったことで、そんなことも思うのかとおもう。屋外の行事なので、雨の心配が大きく、ここ数年天候にめぐまれなかったこともあり、終日の好天に、十年に一度の祭日和とも云われた。高齢化もあり、自治会活動には負担感がある。議論も多く、いきおいその存在意義に触れることになる。子供会も減っているようなので、間になる組織がなくなると、個々が行政とじかに向き合うことになるしかない、とおもう。

小野澤繁雄

◆山形では成人式がお盆の時期に行われる市町村が少なくない。振袖や紋付など余分な出費を抑えるためと故郷への帰省の時期を考慮しての成人式である。親からしてみれば一生に一回の成人式に晴着で出させたいという思いもあるようだ。が、何十年と行われているので定着してしまっている。今年成人者から町の図書館へと図書への寄贈を受けた。若者が活躍できる理想の町づくりは緒に就いたばかりである。

神村ふじを

◆埼玉県熊谷の気温41・1℃は観測史上最高であった。同じ関東平野の住人であり、身近に超高齢

者もいるので、熱中症対策には事欠かないと思っていた。この私が軽い熱中症に罹ったのである。熱帯夜とはいえ普段のようにクーラーがお休みタイマーに入ったままであった。扇風機をつけていたのが幸いだった。神経痛持ちでもクーラー嫌いは許されない猛暑である。

河村郁子

◆今年の暑さは、大変厳しく記録的な猛暑が続いております。私は、何かする気持もおこらず唯々ぼんやりと、いろいろな災害に遭わないのがせめてもの救いとありがたく思っております。これから猛暑は続きます。皆様お元気でどうぞよろしくお願いいたします。谷垣満壽子

◆元農林水産大臣で弁護士である山田正彦氏は東奔西走している。今年四月廃止された種子法を復活させるために。種子法は戦後、コメ、麦、大豆といった私たちの主要作物を守ってきた。廃止したのはアメリカの多国籍企業のためではない。種子はF1であり（自家採種できない）、農薬、化学肥料がセットだから、企業の儲けは莫大なものになる。いずれは遺伝子組み換え作物も作られるようになるだろう。遺伝子組み換え作物はEU、ロシア、中国も撤退しているのに、日本だけが逆行している。新潟県、兵庫県、埼玉県などは独自の条例を制定して対抗している。

先日、生活クラブやまがたで山田氏の話聴いてきた。山形県でも九月の定例会で条例を作るべきだ。より多くの市民に種子法廃止の問題を知ってほしいと、山田氏の長井市での講演会を急遽準備したところだ。

新野祐子

◆東京でも最高気温三十五、六度という猛暑日がつづいている。今朝、ベランダの手すりに雀がとまり、床をのぞきこんでいるのに気がついた。口を開け、ハアハアしている感じである。エアコンの室外機から流れ出す水を飲むつもりらしい。まだ朝のうちでエアコンをつけていなかったのが出ていない。かわいそうに思い、水を入れた浅い皿を置いてやろうと窓を開けたら、逃げてしまった。

松井淑子

◆ことしの夏の暑さは何とということでしょう。猛暑だなんて。昨年までは、夜エアコンのつけ放しはしなかったのですが、ことしはとても耐えられませんでした。別のことで、泣きことは言いたくないのですが、最近目のおとろえが著しくて辛い^{つら}思いをしています。友人ともよく話をするのですが、年を重ねないと分らないことが多くなりますね。

丸山弘子

◆十四歳の夏。ハルは父親と二人でモンゴル旅行に出かけた。一人で家を出て、新千歳空港から羽田空港へ。そこで父親と合流し、北京経由でモンゴルに行った。十八日間後に札幌に戻ってきたハルは、少し日焼けした顔になっていた。旅の報告は次から次へと続き、終わることがない。ウラン

バトルから車で野宿をしながら、ノモンハン事件の現地にも赴いたらしい。しゃべり続けるハルを見ながら、無事の帰宅がなによりうれしいと思う自分がいた。

山内裕子

◆—夏に— 八月三日はわたしの誕生日。娘も息子夫婦も忘れることなく、やさしいメッセージとお祝いを送ってくる。幸せな母親にちがいない。その一方、八月はわたしにとつて、予想もなかったむごい死を死んだ親しい人、数え切れない知らない人たちを思わずにいらぬ辛い月でもある。一九四五年八月五日には、米軍の焼夷弾（しやういだん）に身体（しんたい）の半分を焼かれた母が、苦しみ抜いて世を去った。ヒロシマへの原爆投下は翌日の六日。九日にはナガサキにも。都市の壊滅とともにおびただしい死者が出た。帝国日本がようやく降伏を決めたのが十五日。玉音放送が何を言っているかわからなかったと、多くの人が言う。しかし時間を共有していた人間の記憶は、まちまちなのだ。たとえあの暑い日、ラジオを聞いていたのは、祖母とわたしと健ちゃんの三人。健ちゃんは大資産家の一人息子でわたしと同年、仙台二中の三年生だった。彼と彼の母と叔父の三人が暮らす屋敷が焼失。立ち退きを迫られた借家の祖母たちも行き場はない。五部屋の家をふすまで仕切って、二つの家族が住むことになる。健ちゃんの父の戦死の公報が届いたのは七月末だったかもしれない。

放送は奇妙な声で何を言っているかわからぬ出だしだった。しかし幾らもたたぬうちに少女のわたしの耳は、「ポツダム宣言受諾」のフレーズをいきなり聞きとった。「敗けたのよ」とわたしは

叫び、同時に健ちゃんの眼から涙があふれ出した。一カ月前、母のそばにいたわたしは、病室の誰かのラジオのニュースを聞いたおぼえがあった。連合国首脳（米英ソ）がベルリン郊外ポツダムに集まり、日本に無条件降伏を求めてきたが、政府は拒否したという。ポツダムと無条件降伏の二語は初耳だった。健ちゃんの涙は祖国の敗戦のくやしきより、痛ましく死んだ父を思う涙だった気がする。わたしは泣かなかった。このむごたらしい戦争を始めた者への怒りで、眼がくらみそうだったから。健ちゃんは今、生きてるかしらん。

今年の夏は、高齢には重い試練の中にある大切な友達F子さんを思い暮らしている。四五年八月六日、彼女はヒロシマの女学校の三年生だった。夜中まで天を焦がす火に阻まれて、動員先から帰宅できず、道ばたの石にかじりついて一人で夜を過ごした。夜明け、燃えつきた街の通りを歩きます。街はしんとして音一つない。累々たる死体のころがる通りを手を合わせ、眩（つぶや）きながら少女は歩く。「ゴメンナサイ。熱かったでしょう。苦しかったです。私も死ぬはずだったのに」。そして歩き続けた。

わたしたちが知り合ったのは、たぶん一九八二年頃の仙台。彼女は牧師夫人、幼稚園長の仕事に懸命だった。そのうえ「あの日を生き残った者の責任」を片時も手放していなかった。ヒロシマを語った魂を刻む一言一言を、今日もわたしは思っている。

河内愛子